病氣が治る・金が儲かる

躍り出た創價學會

眞の幸福は迷信か組織力か

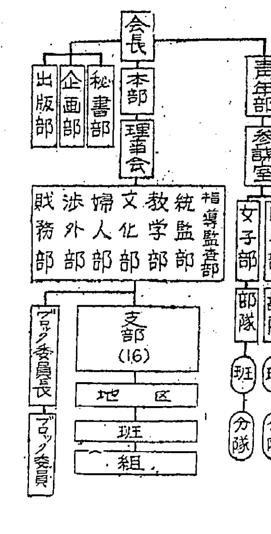
希望探訪

第十七回炭労定期大会で北海道炭労から提案された「創価学会に対抗」する問題は、世論の異常な注目をうけ、組織内外に波乱を巻き起した。九州炭労第十回定期大会でも、執行部に組織の統制を乱す者は除名にすべきだと強い意見が出された。創価学会の問題は北海道や北九州だけの対岸の火災でなく、三池にも多くの信者が現われ「信仰の自由」と「組織統制」の二つの主張点から「信ずれば金が貯まり、病気しない」か「団結こそ労働者の生活と生命を守るか」を希望探訪により、創価学会の実状に編集部としてはメスを入れた。

初代会長は獄死

昭和五年、初代会長牧口常三郎（教育家）は創価教育大策を発表しまた価値論を著わして、これをもつて正しい宗教観（法華経信仰）を得させる唯一の理論と称した。十二年には現会長戸田城聖とともに牧口を会長とし、戸田を理事長として、創価教育学会を創設、十四年には軍人会館において会員総会を開催、十七年には会員約三千名に達したが、十八年治安維持法違反によつて会長以下十一名が検挙され、その活動は一時停止した。十九年には、牧口は獄死した。二十年現会長戸田は釈放され、学会を再建して創価学会と改称した。二十六年には、会員約五千名となり、戸田が会長に就任し、二十七年八月二十七日、東京都知事所管の宗教法人となつた。

今日、会員は約三十万世帯を超すといわれている。

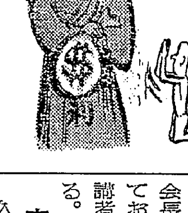


教義は「利善美」

この法人は、「日蓮聖人御遺文集」「日蓮正宗勧行要典」とし、日蓮聖人が建立した「一エン浮提総与」を本尊として、日蓮正宗の教義に基いて本尊流布を行うが、そのために「立正安国論」「観心本尊抄」「開目抄」「報恩抄」「選時抄」「三大秘法抄」「顕仏未来記」などの遺文を副教典的に用いている。

なお、日蓮系諸宗派との間の教義上の論争の中心点は、日蓮聖人の御真筆と称する「一期引法抄」（日蓮正宗の開祖、大石寺開基、日興上人への御譲り状と称されるもの）の真偽と、大本山大石寺の御本尊たる板曼荼羅が国立戒壇の御本尊であるということの真偽にかかつているようであるが、信ずべき歴史的文献によれば、そのような事実は認明されていないというのが現状のようである。

また、教典的取扱いをうけて広く流布されている「価値論」は正宗の教義を知るための哲学的指導書であつて、その内容を要約すれば西洋哲学の価値概念たる「真善美」の代りに「利善美」を置き「真理」というものは、実は価値概念ではなく「利益」こそまことの価値概念であると主張し、正宗の現世利益を理論的に体系ずけたものである。



一般には下種（げしゆ）した相手【一度法を伝えて信仰の種をまいておいた相手】を執ように折伏して信者にすると自分の宿習（過去の罪障）が消滅すると信じて行うものである。

教学部には、助師、講師、助教授、教授の職位がある。これは名誉的な職位であつて、実際の布教活動は班長や組長はじめ、熱心な会員が中心となつてその任に当つている。

一般にこれらの教学部員や班長組長の幹部を養成するため、精鋭教育ともいうべき「一級講義」が会長によつて年一、二回実施されており、各支部に対して少数の受講者数を割当て、受講せしめている。

東洋廣布の歌

久遠の光 妙法の
友宣 流布の時来る
決然 起ちて 今ここに
此の大地をば 踏みしめて
東洋広布は 我等の手で

折伏は強引に

布教活動は定期的に日程を組んで行うほか、この学会独特の「折伏」（しやくぶく）という信者勧誘がある。これは日蓮正宗以外には正しい宗教は存在しないということを積極的に説いている。

この折伏のために「価値論（二五〇円）」「折伏教典（二五〇円）」「開目抄（二五〇円）」「立正安国論（二〇〇円）」「日蓮御書全書（二、〇〇〇円）」「教学基礎問題解説（二〇〇円）」「日蓮上人（三五〇円）」等を用いるが、特に「折伏教典」は最も具体的な折伏方法を記した書として信徒は必携している。

これらの書は学会の出版部で出版販売しており、熱心な信徒はほとんど購読しているという。

このほか機関紙として「聖教新聞（週刊五円）」および「大白蓮華（日刊八〇円）」があり、信者必読とされている。

他宗に数する折伏は、支部別に約一〇—二〇名の会員が代表者に面会を求め、法論を行う方法によつているが、その際の行動が暴力的であると評されている。

政治權力を手中に

創価学会の日常の信者獲得運動は政治勢力の拡張、議席の獲得という目標をたて、二十年後には、学会を国教にし、国立戒壇を富士山ろくに建てる（東京丸の内ビルの大きさのもの）といつている。

三十年四月の地方議員選挙に小泉理事長を東京都議に最高点で当選させた外五十六名の地方議員をそれぞれ各地で当選させている。

昨年七月の参議院選挙には全国区四名、地方区二名をたて、全国二名（北条、柏原）地方区一名（白木=大阪）の三名を当選させている。

信仰は法に先行するという論法の狂信的な信者の選挙運動はものすごく、違反件数も多数にのぼつた。

そのほとんどは同会立候補者に投票しなければ〃罰が当る〃という半ば強迫的な戸別訪問で同容疑検挙事件数の八割に及んだ。

これら選挙違反は〃法難〃と称し、目的のためには手段を選ばぬという論法なので処置なしの格好

軍隊組織で拡張

創価学会としては日蓮正宗との間に包括関係も制約関係もない。ただ正宗としては、創価学会を正宗信徒会たる法華講として傘下に所属させているに過ぎない。この法華講は一寺一講のもので、創価学会は大本山大石寺の法華講であり、戸田城聖はその講頭である。

創価学会の組織は、会長の下に四名（小泉、石田、柏原、白木）の理事があり、会長が代表役員、理事が責任役員である。これらの責任役員は評議員会で選ばれ、評議員会は本部各部長、支部長、本部婦人部常任委員、青年部参謀室員からなる。任期は会長終身、理事は二年である。この理事の下に支部、地区、班組があり、これが教団組織の主体となつているが、別に「青年部」と称する行動隊があつて、会長に直属しており、男子部と女子部とに別れ男子部は部隊、隊、分隊に、女子の部は、部隊、班、組に組織されている。

事務局の機構は「本部幹部会」「教学部」「企画部」「指導監査部」「情報部」などに別れ、昭和三十一年四月一日から「学生部」を新設した。「文化部」も新しい部であるが、この部は政治的活動をも行つており「教学部」とともに活動の最も活発な部である。このほかに会長直属として「秘書部」「出版部」があり、ことに出版部は、この法人の収益事業部門として極めて大きな役割を果している。

男子青年部歌

悪鬼のすさぶ殿堂も
閥特権のばらからも
聖祖の教にそむきなば
なぞ天誅を免れん……

「青年訓」

若き花の若武者として、ご本尊の馬前にしかばねをさらす気はくで末法濁世の法戦におもむき他宗に法論をしかけ、折伏に当つては、叱た呵責し、謗法払い（他宗の本尊を焼払うこと）して広宣する。

貧者につけこむ

創価学会飛躍の原因について次のことがあげられる。

(1)戸田会長の統卒力

(2)軍隊組織

(3)学会という名と価値論という理論が若い人をひきつける。

(4)他宗を積極的に攻撃し、唯一の本尊を強調する。

(5)折伏という信者獲得方法がある

(6)日蓮正宗という既成教団につながつている。

(7)入会費が少い。

では何故炭住街に食い入つたか

(1)災害が多くいつ落盤で死ぬかわからぬ。ケイ肺という職業病がある。

(2)官公労や、他企業にくらべて知的水準が低い。

(3)生活が苦しい。

(4)一山一社会をつくつているので伝播力が強い。

(5)娯楽のない「炭住」の人たちに折伏や組座談会は連帯感をよび楽しい。

などがあげられている。

氣づいた時は遅い

大牟田、荒尾でも常識で判断出来ない事例が相当起きている。

その一 創価学会に入つたが病気は一向よくならないと訴えれば家族全員が信仰しないからだといつた（四山）

その二 いちの東谷社宅でKさんという宮浦鉱の組合員が死んだ通夜の晩に創価学会の勝立地区の責任者が来て、棺桶から死人をひつぱり出し身体を曲げたりのばしたりしてこれで霊は生き返るといつた（大牟田社会党機関紙より）

その三 勝立の宮前社宅では重態で死寸前の病人を打つたり、けつたりして死を早めてしまつた（社会党機関紙より）

その四 N君は革新的な若者として、特に演劇や紙芝居に熱心であつて、昨年結婚して新しいスタートを切つたが、奥さんが一寸身体の調子が思わしくない時期に、その附近に網をはつていた、学会の尖兵はすかさず、この若い奥さんをくどき落した。信仰を深めれば病気はよくなると熱心に信仰したが病気は悪化するばかり、死の寸前に迷信を悟り、市立病院にかつぎこんだときに危篤でついに永眠の人となつた（社会党機関紙より）

投書に寄せて

不可解な創價学会

一組合員より次のような投書が六月中旬に本部に寄せられた。その後編集部としては最大の努力を集めて研究、調査して発表の段階となつた

投稿者の意に添わないかと思うが、九大の講師小畠信久先生から学説的に解説して頂いた。

私は人のすすめによつて昭和三十年十月に創価学会に入会しました。すすめる人の言葉では私の持病であるぜんそくが治ると云いましたし、信仰によつて人生の道が開けるとも云われましたので喜んで入りました。その後私の妻が突然死亡しました。ところが、私の信仰が足らんから妻が死んだと云われ残念でたまりません。参議院選挙のときも会員である三鉱労組の組合員が学会の代表者である某氏に投票せよと云われました。

私は組合員として苦しみました又こんな投書の反響も考えましたが、勇気をふるつて投書した次第です。

入会すれば仏のイハイまで変えなければなりませんし、人によつては仏壇を焼けといわれた人もあります。

神様の護符も取払われるし妻が死ねば信仰が足らんと云われます若し私が死ねばどうなるでしようか。やはり信仰が足らなかつたからでしようか。偉い人が死んだらその人も信仰が足らなかつたからでしようか。

私には判らない点が多過ぎます組合員の中にも学会の人が居られますからご返事下さい。

組合の執行部はどうお考えになつて居られるかお教え下さい。

緑ケ丘 一組合員

病気は醫者で癒せ

私の知つている例から申し上げましよう。私のごく親しい人にやはり創価学会の会員だつた人がいます。病気のひどい時にいわゆる「折伏」（しやくぶく）されて入会したのです。仏壇は勿論、ダルマの掛軸まで焼いてしまいました入会した後も病気ははかばかしくなかつたのですが、信仰さえしていれば、医者にはかかる心要ないと云われて随分悩んでいたようです。その悩みは子供が病気になつた時とり返しのつかない事をうんでしまいました。医者にかかつた時にはすでに手遅れだつたのです

しかもあなたと同じように「信仰が足らん」としかられました。その時はじめて彼は信仰というものの無力さを覚つたといいます。彼はぴたりと信仰をやめてしまいました。それ以来会えばきまつて彼は次のように述懐します。「あの時なまじつかお祈りなどに頼らず、すぐ医者の所にかけつけていたら子供を死なせなくてすんだかも知れないと思うと残念で残念でこのほぞをかむようなくやしさは一生ぼくから離れないだろう」と

同じような経験をもつている人は案外多いのではないかと思います。創価学会では病気がなおつたわずかな例を鳴物入りでふれ歩いているようですが、その背後にはなおらなかつた人、または死なないまでも病気がひどくなつた人がどれくらいいるかと思うとゾーッとします。ごく稀な例—それすら私には疑わしいのですが—に頼るよりも、毎日目の前で沢山の人をなおしつつある科学的な医学の方を信用すべきでしよう。病気になつたら躊躇することなく医者をたずねるべきだと思います。

人間の死ぬのが信仰が足りないからというのであれば、人間誰でも一度は死なねばなりませんからすべての人間が、そしてすべての創価学会員が不信仰だということになつてしまいます。しかしその場合でも学会では抜道をこしらえています。会長などの偉い人が死んだ時は、信仰が足りないからではなくて、人間の悩みや罪を背負つて召天するのだということになつています。われわれ普通の人間が死ぬのは信仰が足りないからであり、偉い人が死ぬのは人間を救うためである。こういうでたらめな云い方は、あなたが指摘していらつしやるように誰が聞いてもおかしいことです。

創価学会は外の宗教に比べて一段と排他性の強い宗教です。ダルマさんの絵まで焼かせたという例は外の宗教では聞いたことがありません。また罰が当るとか、たたりがあるということをよく云います。これも宗教のやり方としては旧いやり方です。創価学会は新興宗教といわれることを非常に嫌つているようですが、たしかに原始的な宗教に逆もどりしたような古さをもつています。

こうした例をあげればきりがありませんのでやめにしますが、ただ最後に云つておきたいことは、こうした宗教のはびこる基盤がわれわれの周囲にあるということです。それはわれわれの生活が貧しすぎるからです。（病気すら応々にして生活の貧しさに起因しています。死なないですむ病人をお金がないばつかしに死なせてしまつたという例をわれわれはよく聞きます）また炭鉱の仕事が多くの危険をともなつているからです。こうした悩みや不安がなにものかに頼りたいという気持をおこさせます。しかしこうした気持のはけ口を宗教に求めてゆくのは、一種の逃避であり、敗北主義です。創価学会では、信仰さえしていれば生活がよくなると説きます。しかし何もしなくては賃金がビタ一文あがるものでないことはわれわれのよく知つている通りです。祈りを説き現状を是認することは、われわれの向けるべき目をあらぬ方向にはずすことによつて、支配階級たる資本家の利益を守ることに通じます。本人にそういう意図はなくても、結果的にはそうです。

自分さえ救われればいいという気持は組織の力を弱めます。団結することなくしては個人の生活も高めえないということはわれわれのよく知つている所です。われわれは生活を守り、高める組織として組合をもつています。個人のもつているすべての悩みや不安は、宗教に訴えるよりも、むしろ組合の執行部に訴えるべきです。

生活の貧しさや悩みを解決するものは、信仰ではなくて組合を強くすることにあることをはつきり銘記しておくべきです。